

ZOCALO 2015 10・11

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

2015年11月14日(土)～2016年1月31日(日)

企画展

旅と芸術—発見・驚異・夢想

旅—素晴らしき多様性にめぐりあうために

旅について、みなさんは何を夢見ますか。海外を周遊したい人もいれば、もっと身近な場所を訪ね歩きたい人もいます。現実になりつつある宇宙旅行に憧れる人もいれば、椅子に座ってSF映画や空想小説の冒険を主人公の気分ですら楽しみたい人もいます。旅への想いは人それぞれですが、旅に共通しているのは、日常生活からいったん離れ、普段とは異なる体験をし、未知のものに驚き、多様な世界にふれることではないでしょうか。



左上：カナレット(ジョヴァンニ・アントニオ・カナル)《ヴェネツィア、サンマルコ広場》1732-33年頃 油彩・カンヴァス、東京富士美術館蔵
◎東京富士美術館イメージアーカイブ/DNPart.com
右上：ヴァロキエ《モロッコのアラブ人、メッカへの巡礼者》19世紀後半、アルビュメン・プリント、個人蔵
右下：クロード・モネ《貨物列車》1872年 油彩・カンヴァス、ポーラ美術館蔵

世界の多様性を教えてくれる旅は、古くから芸術家にさまざまなインスピレーションをもたらしてきました。遠方への旅が容易ではなかった時代は、未知の世界を旅人から伝え聞き、想像力を働かせながら描いています。例えば、一七世紀に活躍したキルヒャーは、世界中で布教していたイエズス会士の情報をもとに、異国の風物について不思議な書物を残しました。街道、馬車、宿などが次第に整い、ヨーロッパ大陸を巡るグラッド・ツァーなどが盛んな時代になると、名所や遺跡を描いた絵画が人気を博します。ヴェネツィアのサンマルコ広場を写真のように精緻に描いた、一八世紀のカナレットの都市景観画は、その典型的な作例です。一九世紀になり写真術が登場すると、異郷を写真で記録するようになり、西洋で関心が高まったオリエント世界は格好の被写体となり、芸術家にも大きな影響を与え、画家たちもオリエントの国々へ取材に出かけます。また、一九世紀後半のフランスでは近代的な鉄道網が拡充し近郊へのアクセスが便利になると、身近な自然が再発見され、レジャーや保養を楽しむようになります。印象派の画家が描く田園風景は、こういった郊外への小旅行にも深く関連しています。



アタナシウス・キルヒャー『シナ図説』1667年刊、書籍町田市立国際版画美術館蔵
蓮舟の上ののる仏教の図像を描いている。

ところで、旅を通して世界の多様性を本当に味わうためには、旅人は何を心得たらよいでしょうか。この点について思索を深めたのが、二〇世紀初頭にフランスの海軍で船医を務めながら、異国での経験をもとに文章や詩を綴ったヴィクトル・セガレンです。セガレンは、野生を求めてポリネシアの島にいきついたゴギヤンが世を去ったわずか三か月後、この画家の最期の家をヒヴァ・オア島に訪ねます。ゴギヤンが遺した作品、資料、草稿に感銘を受けたセガレンは、異文化をどのように受け止め、語るべきなのか、考えを巡らしていきます。一九〇七年には『記憶なき人々』を出版し、西洋文化の侵入により固有性が脅かされていったポリネシアの文化を、西洋人ではなく原住民のマオリ人の視点から記します。そこには異国が他者なのではなく、旅人(西洋)こそ他者であるという、反転する見方が表れているのです。その後も、中国をはじめ世界各地を訪れたセガレンは、旅先で出会うエグゾチックなもの、多様なものを、旅人の一方的な視線や解釈を超えていかに経験しうるか、模索し続けました。そして、旅人の知識や想像と、旅先の現実とが常に衝突し、フィードバックしあう先にこそ、世界の真の素晴らしき多様性が開けてくると、旅の真髄を捉えていきます。現代の私たちの旅の多くが、ガイドブックの情報に従って現地をただ確認するだけなのに対し、セガレンの旅の姿は実に本質的であったといえるでしょう。

MOMAS コレクションⅢ
2015.10.10 [Sat] - 2016.1.17 [Sun]

MOMASコレクション第3期では、昨年9月に64歳で亡くなった辰野登恵子(1950-2014)の作品を特集展示で紹介し、長野県岡谷市出身の辰野は東京藝術大学の油画専攻に学び、70年代にグリッドやストライプをモチーフにしたシルクスクリン作品で注目を集めます。間もなく油彩画に回帰すると、80年代以降、豊かな色彩で有機的形態を描く独自の表現を追求し、抽象絵画の新たな可能性を示し高い評価を得ました。40年にわたる辰野の画業は、日本の現代絵画を語るうえで欠くことのできない重要なものです。

今回の特集展示は、90年代初めに制作された油彩と大型のリトグラフ作品を中心に構成します。巨大なカンヴァスいっぱいにぼぼこと連なるいくつもの丸いかたち

辰野登恵子 — まだ見ぬかたちを

や、四角形がつながった大きな菱形は、辰野作品の代表的なモチーフです。例えば、油彩でのこの特徴的な丸いかたちの変遷をたどると、はじめはフラットな円形だったものが次第に立体感や重量感を備えたかたちへと展開し、92年に制作された今回の展示作品では、圧倒的なヴォリュームを持って絵画空間に存在しています。これらのモチーフは、長辺が2メートルを超えるカンヴァスに、細い筆のタッチを繰り返し積み重ねて描かれます。あらたに加えたひとつのタッチが画面に及ぼす変化を注意深く見極めながら、飽くことなく手を加え、何度も描きなおすことで徐々に生み出されるかたちが、絵画でしか実現しえない複雑で濃密な空間を創りだしているのです。

一方、こうしたモチーフの展開を共有しながら並行して制作されたリトグラフ作品には、油彩画の塗り重ねられた筆触の重苦しさを解放されたような軽やかさがあります。しかし、注意深く目を向ければ、版の重なりにより輪郭線と陰影にずれが生じていたり、丸みを帯びた量塊と思えたものがふと空洞のような凹みに見えたりと、単に同じかたちの連なりに見えたものが、実は曖昧かつ両義的であることに気づかされます。この味わい深い空間性に気づくとき、一目見たときに受けるシンプルでおおらかな印象は鮮やかに裏切られるのです。油彩と版画という異なる手段を往還することで、より深みを増し展開していった辰野登恵子の作品世界を堪能いただければと思います。

さて、辰野が本格的な制作を開始する直前の60年代末から70年代初めは、美術や芸術のあり方に厳しい目が向けられ、その仕組みが根底から問い直された時代でした。もはや絵画の時代ではないという意識が主流であった中でキャリアをスタートさせ、それでもなお絵画を描くことを選んだ辰野は、80年前後を境にグリッドやストライプといったミニマルなイメージから、ストレートに「絵を描く」ことに回帰します。

今回、その過渡期にあたる時代に制作された未発表のシルクスクリン作品を特別出品します。塗り重ね削ぎ落とし、さらに塗り重ねるといった手わざの痕跡を感じさせる領域と、それまでの無機質なストライプがせめぎ合う作品群は、辰野の作品理解の新たな一助となるものと期待しています。(I.O.)



- 1:《MAY-25-91》1991年 リトグラフ、紙
- 2:《NOV-23-1993》1993年 エッチング、アクアチント、紙
- 3:《MAY-21-91》1991年 リトグラフ、紙
- 4:《UNTITLED 92-8》1992年 油彩、カンヴァス 練馬区立美術館蔵